

解答・解説

問1 傍線部内の「令」の句法と、副詞「惟」について検討する。

令^{ムルニ} 婦^フ 収^メ 水^ミ、惟^ダ 得^ニ 其^シ 泥^ヲ。

「令＋名詞＋動詞」で、「名詞ヲシテ動詞（セ）シム」と訓読し、「名詞に動詞させる」と訳す。「惟」は「唯」と同じ。後に来る語句の後に「ノミ」を送って読み、「ただ」だけ」と限定の意を添える。

▶ 選択肢判定チェック ▶

- ア 婦人にこぼれた水をすくわせたかったわけではない。(×) 「得」が訳出できていない。(×)
イ 使役の意「令」の訳出が不足している。(×) 「泥水だけ」ではなく、「泥水をすくうだけ」が正しい。(×)
ウ 婦人はこぼれた水をすくったが、ただ泥水だけしかすくえなかった。
エ 使役の意「令」の訳出が不足している。(×) 限定の意「惟」の訳出不足と、「得」の訳出の誤り。(×)
オ 婦人はこぼれた水をすくったが、すでに泥水になってしまっていた。
カ 使役の意「令」「限定の意」の「惟」の訳出がきちんとできている。(○)
キ 婦人にこぼれた水をすくわせたが、ただ泥水をすくうだけだった。

よって、正解はエ。

問2 最後の一文「若能離……定難収。」という太公の言葉に着眼し、水をこぼすことは、妻が離縁を求めたことの、水をすくうことは、復縁を求めたことの「たとえ」であることを理解する。

太公曰、「若能離^{ハク} 更^ニ 合^{ハントスルモ}、覆水^{メテ} 定^{カフシト} 難^レ 収^メ。」

▶ 選択肢判定チェック ▶

- ア こぼれた水は盆に「戻せないこと、復縁できないことが合致している」。(○)
イ 一度別れた夫婦は二度と復縁しないものだ」とは言い切れない。(×)
ウ こぼれた水は二度と元に戻らないのと同じように、たった一度のチャンスを失うと二度と好機は巡ってこないというこ。 「元に戻せないこと」と「二度と好機がないこと」は、内容がズレている。(×)
エ 一度別れた夫婦は二度と復縁できない」とは言い切れない。「復縁できない」という不可能の意と、「別れてはいけない」という禁止の意は異なる。(×)
オ 一度別れた夫婦は二度と復縁できないものだから、よほどの出来事がない限り夫と別れてはいけないということ。

よって、正解はア。

漢文の世界

たとえ話

漢文の世界では、相手を説得するための方法として、たとえ話を有効に活用することが多い。本文では、二度と復縁する気のないことを、こぼれた水は二度と盆（鉢・ボウル）に戻らないことにたとえながら、元の妻からの申し出を断っている。何にたとえてどのような主張が展開されるかは、話が終わるまでわからないが、相手が説得する側の意図にハッと気づいた時点で、たとえ話の効果があらわれることとなる。

出典
韻府群玉

作詩者用の韻

書と、分類百科事典とも言うべき類書とを兼用する辞書。宋末元初の陰時夫によって編纂された。

句形Q
省略Q
解答と現代語訳

太公初娶馬氏。読書不事。産馬氏求去。太

太公ははじめ馬氏を妻にした。

太公は本を読んではかりで働かないでいた。

馬氏は

太公に離婚すること
を求めた。太公

1

公封齊。馬氏求再合。太公取水一盆傾于地、

は齊の国を領地として与えられた。馬氏は

太公に再婚すること
を求めた。

太公は水を鉢に注いで

地面にこぼし、

婦をして水を収めしむるに、惟だ其の泥を得んのみ。

令婦収水、惟得其泥。太公曰、「若能離更合、覆

婦人（＝馬氏）にその水をすくわせたが、ただ泥水をすくうだけだった。太公は言った、

「おまえは一度別れて再び（私と）復縁できると考えているが、

水定難収。」

こぼれた水は（元の鉢に）戻せはしないのだ。」と。

書き下し文

太公初め馬氏を娶る。書を読みて産を事とせず。馬氏去らんことを求む。太公齊に封ぜらる。馬氏再び合はんことを求む。太公水を一盆に取りて地に傾け、婦をして水を収めしむるに、惟だ其の泥を得んのみ。太公曰はく、「若能く離れ更に合はんとするも、覆水定めて収め難からん。」と。

語句Q
解答

- ア 読み＝なんじ 意味＝おまえ
イ 読み＝よく 意味＝～できる